

TS魔法少女がまあまあ  
優しくない世界で頑張  
るハナシ

のへてみこそ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

輪廻の輪から転生を果たし魔法少女となった主人公。彼女はかわいい女の子のことでキヤツキヤウフフてきるのだろうか。n+1番煎じでお送りします。見切り発車でございませう。作者はタグを上手くつけられるのでしょうか。消えたらごめんなさい。

# 目次

プロローグ	1
疑って、洗われて	12
優しくない部分	21



# プロローグ

気がつけば転生していた。年齢が2、3の頃から少しづつ思い出ししてきた。前世の記憶とやらを。

まあ、人生悔いあれどこんなものだろうって感じてぼっくり逝ってから、気づいたら赤ちゃんとしてこんにちは。なんか、申しわけない気持ちともう一度人生やれることに葛藤を覚えつつはや10数年。性別の違いにもなれた。だがスカートは無理だ。

前世とは少し変わった世界で  
今日も生きています。

なぜ、こんな人生紹介してみたものをしているのかというと、今まさに、信じられない出来事が起きているからだ。驚きのあまりに現実逃避に走っている。夢だと思いたい。というか、まじふざけんなって感じ。

だって、目の前には得体の知れないマスコットがいて、  
「魔法少女になってみないかな？」

とこちらに向かって呟いているからだ。マルチ商法かよ。

最初は自分ではなく、周りの誰かに言ってるんだと思って無視をしていた。だから、肩に乗ってきて耳もとで嘯くのだ。たちが悪い。そう、もの凄くこそばゆいのだ。力がぬける。周りの人たちもコソコソ噂話をしていて凄く気まずかった。

あなたは選ばれし魔法少女なのです。なんて。

あたかも、自分の黒歴史を掘り起こして、羽ペンでこしよこしよする感じ。

いや、もういいでしょ、自分はもう大人なんだ。まあ、外見年齢は子供だけど。あのときみたいに、家族に自分が考えた魔法理論を発表しよう。なんて。もはやできない体になってしまった。

とりあえず、走って逃げた。

それはもう、道を歩いている人が二度見するくらい走った。

だって怖いんだもの。

今にして思うに私を見てたのではないのかもしれないけど。まあ、関係ないか、こんな些細なこと。

下校中の出来事だったので、いつも登下校している通学路を大きく遠回りして家へと戻る。まっすぐ帰ると家バレすると思ったから。スパイアニメみたいに何度か電柱の影に隠れて後ろを確認した。

これが意外と楽しい。

大きく乱れている息を整えて、自室のベッドの上で一息をつく。この時間帯は家には誰もいないためとても静かだ。衣擦れが静かな部屋の一室に響く。

「ふぁー恐ろしかった。あのヘンテコ生物。いったい何だったのかな」

「ヘンテコ生物など呼ばれる筋合いはないかな。そのような名称はもつと仲がよろしくなつてからこそ効用を發揮するだろう」

なんか、いる。音のなる方へ首を傾げる。

天井にあのマスコットが浮かんでいた。

時がとまった気がした。

悲鳴をあげなかった自分を褒めてほしい。

どこから侵入しているんだとか、こいつはいったい何者なんだとか、頭の中でいろんな疑問が駆け巡って。結局どうでもよくなった。まあ、諦めた。こりや、むり。

ベッドに倒れ込む。もう、家バレしているじゃん。このヘンテコ生物は何のためにここまでするのか。

「何のよう?」

「魔法少女になつてくれないかという相談だよ、僕のレーダーに反応してね。キミ、魔力使えるでしょ」

「魔力？なに、それ」

「普通のニンゲンはね魔力を隠蔽することなんてできないんだよ。それで、探しだすのに手間がかかった」

「隠蔽、もしかしてコレのこと」

自分は体の奥底に眠っている、熱いやつを動かした。幼少期の頃暇で暇でやることになかった自分は、魔力の運用に活路を見出したのだ。

「そう、ソレ。まさか、こんなにも魔力があるなんて、管理局の奴らの目は節穴だな」  
「あの、なんで魔法少女になるコトが前提みたいにして、進めようとしているの。そして、管理局って？」

「魔法少女というのがどんなことをするのかを説明しようか」

こいつ無視しやがった。不法侵入しているのに。腹ただしい。こいつはプライバシーベクトルのプライバシーを侵害している。

「魔法少女とは一言でいえば、こちらの世界にやってきたモンスターを退治する役割を担っている。彼女らがいないと、多くの命がモンスターの凶刃の手にかかるだろう。

そう、ちなみに、この手の事実は情報統制されていてね、むやみに他の人に話すとそれ相応の対処がされるよ」



「それで、私にそのモンスター退治をやれっていうわけ？少しよく分からないな」  
かなり強引すぎる気がする。

「そうだよ。この国は今人材不足なんだ。だから、処理がおいついていない」

「どういうこと？」

「この映像を見てもらおうか」

そして、マスコットはポケットの中からプロジェクターを取り出し、コンセントへコードを差した。そして、手に持っていたUSBメモリをプロジェクターに差し、スイッチを押した。

あと、かっつてに家の電気使われてる。そもそも、家の中にはどうやって入ったのか。二階のベランダが開けっ放しだったっけ。魔法で入ったのかな。

「魔法とかで映像を映したりしないの？」

「そんなことしていたら、魔力の無駄遣いではないか」

なんか常識のない人を見る目をされた。心外。

実は、魔法少女って思っていたよりも世知辛いのか。

そんなこんな考えるうちに、部屋の壁に映像が映しだされた。

「これは、現在発生している、モンスターとの戦闘記録、ライブ配信中だね」

スクリーンには一人のコスプレをした少女と、それを取り囲む数え切れないほどのモ

ンスターがいた。

「ねえ、どういうこと」

「だからいったらどう、人材不足だって」

少女がたくさんのモンスターに襲われている。今ところは大丈夫そうだが、いつ、この危うい均衡が崩れ去るのか予断を許さない。

「どうすれば彼女を救うことができる?」

私は白いマスコットに詰め寄った。

「魔法少女になれば助けることができるよ」

「この腹黒マスコットが。やるよ。やってやるよ、魔法少女とやらに。方法を教えろ」  
金属の棒にハート型の細工が施されている所々に流線形の意匠が雰囲気醸し出し  
ている。所々には宝石が装飾されていて、アクセントを与えている。白いマスコットは  
ポケットの中から、そのステッキを取り出した。

「このステッキを持って、自分のなりたいたいもの心の中に描けばいい」

私はステッキを手に握って。思う。

光が辺りに満ちる。

気がつけば、私の衣装は変わっていた。

「ナニコレ」

ゴーグルに黒いスカーフ、そして露出高めめのくのいち衣装。

「ねえ、マスコット、これ何」

「それは、魔法少女の衣装だよ」

「魔法少女って、皆こんな感じなの」

「それは、キミの魔法少女に対する意識の問題だよ。ふしだらな気持ちを抱いているのだよ」

「気恥ずかしさに下を向く。なんか、昔の自分にたいして強く怒りたい。とりあえず部屋にかけているパーカーを羽織る。」

今は、そんなことしてる場合じゃない。首をふって、気持ちを切り替える。

「それで変身したけど、どうすればいいの」

「そうだね、ここから少し離れた所に行く必要があるね。屋根の上を走っていかうか」

「屋根の上？」

「身体能力が強化されているからね」

「うん、やってみるよ」

「屋根を忍者みたいに走る。」

「近くにたどり着いたら、境界石に案内するから、そこから向こうの世界に入ってね」

「うん、わかった」

境界石ってなんだよ。まあ、着けば解るか。

「はあ、はあ」

周りにはたぐさんのモンスターがいる。オオカミの姿を真似たモンスターたちは、私の方へ向かって襲いかかってくる。

マズい、倒しきれない。このままじゃ。

私は怖くなってしまい、目をつぶってしまった。けれど、いつまで経っても何も起こらない。

おそるおそる目を開けてみる。

するとそこには、黒髪をたなびかせた、くのいちの姿をした恥ずかしい人がいた。黒のパーカーは腰元に結び着けられている。黒のゴーグルのせいで顔がよく分からない。でも、肌色が多い。

おもわず、目をつぶってしまった。

「ちよつとまって、その反応はこつちも恥ずい。というか、きつい薄々自覚はしているから」

目をあけて彼女の姿をしてみる。彼女はゴーグルを人差し指でくるくると回してい

る。そして彼女は恥ずかしいのか、頬が少し赤く染まってる。

「そういえば、モンスターは？」

「ああ、そいつらなら。ほら」

周辺には倒されたモンスターが転がっていた。

「これを一人で全部倒したの……」

「いや、そんな大したことじゃないよ。コイツラってあまり強くないっぽいし。こいつがそう言うてたもの。キミならできるって」

彼女はベルトにくくりつけられている白いフェレットみたいな、妖精さんをつつきながら話している。器用にも、反対の手ではゴーグルでお手玉をしている。

なにか、とても楽しそうだ。

「あれ、何の反応もない。じゃあいいか」

「いや、それは。ううん」

その白い妖精さんは目を回している気がする。なんか、うめき声を上げている気もする。でも、まず、それよりも先に言うことがある。

「なんでもありません。それより、助けて下さって、ありがとうございます」

私は妖精さんのことを見てみぬふりをした。ツツコミをしたい気持ちを抑えて、大人

な対応をした。きつと、こうして私は成長するのだろう。

「そんな、全然ありがたられることとかじゃ無いんで、気にしなくて大丈夫ですよ。それに、こいこのつて、困った時はお互い様って言いますし」

「いやいや、それでも何かお礼がしたいです」

「うーん。それなら、魔法少女について教えてくれない」

「いや、私はまだ魔法少女になってから数ヶ月しか経っていなくて。ぜんぜん、私よりも経験が豊富にありそうですから」

「いや、今日が初出勤日だよ」

「ええ！そんなんですか」

でもとても手慣れている様子です。

「そうなんだよ。つまり私はキミの後輩というわけです。ねえ、センパイ」

先輩……。なにか胸がおどる言葉です。

「じゃあ、何でも聞いてください、後輩さん。私分かることならなんでも答えます」

「とりあえずここから、出たいんですけど何かお作法とかありますか。ほら、コイツのびちやってるから」

「境界石を回収すればこの場所はもとの世界に戻るそうです」

「へえー。ありがとう。あつ、それと、電話番号教えてくれないかな。ちよつとね、コ

イツ信用ならないと思うから」

白い妖精さんの頬摘んでいます。少し羨ましいかも。

「電話番号ですか、別に構いませんけど」

「ほんとうにありがとうございます。こいつだけが情報源だと、偏ってるから」

彼女は白い妖精さんの頬をまたつついた。

「わかりました」

「じゃあ、お疲れさまです。失礼します」

彼女はひとつ飛びにマンションの屋上まで行くと、そこからかなりの速さで駆けていった。

何か不思議な人だったなあ。

## 疑って、洗われて

なんかかわいい子だったなあ。そんな感想を抱いております。

外見詐欺師の自分は、家路を電車で揺られていました。

魔法少女のコスプレ風衣装を長い間着るのは、精神的なスリッパダメージが発生するためにそうそうに変身をといた。

そうすると変身の恩恵は受けられないために、ゆつくりと過ぎ行く町並みを眺めているのです。

あとのマスコット、正式名称が妖精さん、というらしい。

まあ、どうでもいいけど。家に帰ると母がパートから帰っていた。

「ただいまー」

「あらあ、どこかに出かけていたの？」

「ちよつと、友達とところに出かけていたんだ」

ふと今思ったけど、パートとアルバイト違い言って何だろう？

心に浮かぶ不思議なことが、川に浮かぶ水の泡のように浮かんで消えていく。

とりあえず、マスコットないしは妖精さん、彼が起きるまですることがないから。



魔法少女についてパソコンで調べてみる。

ふむふむ。一番最初に出てくるのが、政府関係のホームページか。というか、魔法庁なんて存在していたのか。

私がいままで生きていた中でたくさん情報に触れてきたけど、記憶の中には残っていないなあ。

そんなものがあつたら、昔の頃と比較して気になっているはずなのに。

少しづつ降り積もっていく。

SNSも見ってみるか。

とくに情報はなし。

「そういえば、ジェットコースターみたいな衝撃を感じた時から記憶がない」

「おお、目が覚めたの、結構起きないから心配したんだよ」

ベットの所でタオルケットをかけておいた白いフェレットが目を覚ました。

彼は天井を見て何かをつぶやきそうになって、慌てて口をくつつけた。

そして、取り繕ったように会話を始める。

「そういえば、キミはモンスターを倒したのかい、一人で」

「そうだよ、チュートリアルでもあつたの？」

「初めての戦いは、場に飲まれることが多いから、その様子だと何の問題もなさそうだね、よかった」

「あら、心配してくれるんだ」

「あの光景は。いや、なんでもない」

「何口を滑らしているの。そういうのは心の奥深くにしまっておかないと。そういえば、契約書とか給料体系とかどんな感じなの」

「？」

彼は器用にも尻尾を使って、？のマークを描いた。

「おお、うまい。思わずかわいいと思ってしまった。それはさておき。」

「いや、例えばモンスターとの戦いで負傷した場合はどうするの？」

「基本的に魔法庁の医療センターで治療を受けてもらよ。もちろん無料でね」

「ふーん。それでお金は？」

「倒したモンスターの質と量で一般化されて、MAGICポイントが支給されるよ」

「MAGICポイント？何それ」

「専用のアプリをインストールすると色々なものと交換することができるんだよ」

まあ、少女と呼ばれるような年頃の人たちがいきなりお金を入手できても、あまり良いことには使うことはないもんね。宝くじがあった人の末路は良くないってよく聞く

し

いちおう税金対策とかも考えているのかな。まあそもそも、命かけた対価がお金で評価されてしまうのも無理な話だけだね。

それに、自分ら、未成年だし。色んな疑問は残るけどね。今はまだ、まだね。

「ふーん。まあ、いいか。ご飯食べに行ってくる。じつとしていてね」

自分は扉を開けて、下の居間へと降りていく。

妖精は彼女がいなくなるのを見ていった。

「未恐ろしいな子だな」

その尾はピンと直立していた。

魔法少女ってどんな仕事？アルバイト？なのかな。母の美味しいご飯を食べながら、居間に流れているTVを見る。

そこにはちょうどいいことに魔法少女のニュースが流れていた。

それは魔法少女がモンスターを倒しているという最低限の情報だけで構成されていた。たんなる事実の平叙文は直ぐに過ぎ去っていく。

もつと、詳しい情報が知りたいな。

けれどもすぐに違うニュースへと変わってしまった。  
むむ。

「ねえ、母」

私は母に問いかけてみることにした。

「魔法少女って何？」

「魔法少女？」

母は、私が居間に放り投げた言葉を、それを手のひらで2、3階転がした。  
スマートフォンに向けられていた視線が戻ってくる。

「あんまり知らないね。でも、どうしていきなりそんなことを」

ふーん。そんなことねえ。

それははたして、そんなことで済ましていい問題であるのだろうか。

心の中で降り積もったきた疑いの種は少しづつ、芽をひらかせてきた。

「何でもないよ」

私は首を横に振った。

私は食べ終わった食器を台所で軽く洗浄してから、洗浄器の中に放り込んだ。

「部屋に戻ってるね」

自分は階段を一段とぼして、妖精さんの元へ戻っていった。

「妖精さん。私、魔法少女になってもいいよ」

白いフェレットの尻尾が風にたなびくこいのぼりのように揺れている。

「本当に！それはありがたい。感謝する」

「少しばかりお願いがあるんだけどね。それはまた後での話にしておくとして」

自分はそこで一端、息を切った。

「これからよろしくお願いします。マスコット」

「マスコット、か。まあいつか。本当にありがとう」

翌朝。

初めて知ったけど、妖精も睡眠はとるんだなあ。朝まだ、鳥たちのさえずりがBGMとして町に響いている中

私はパソコンの画面と睨めっこしていた。色んな国々のニュースを見ては、この先にどんな出来事が起きるのか

軽くフローチャートを組んでいた。

あんまり、時間をかけてもろくなことにはならないけど。手頃なところで止めて、椅子の背もたれに寄りかかる。

こんな似なくてもいいのになあ。

誰の為でもない独り言は眠ったふりをして、いる妖精の耳に届く。

自分はそれに気づかないままパソコンの電源を切った。

さてと、そろそろ下に降りるか。

枕と枕している、愛くるしいフェレットはその尻尾を大事そうに抱えている。

それを横に見て、私は扉を開ける。

大人経験者にとつて、小学生の勉強はとともつまらなく感じる。だから、私は屋上で風を感じている。

何度経験したらわかってくるのだけど、風といつても色んな風があるから意外と飽きないもの。

今日も持ち込んだ本とクツションにもたれかかりながら時間が降り積もっていく。

だから彼女の訪問は予想外の出来事だった。

いつものように屋上の日陰に佇んでいる。

そんな時、建物の影ではない影がページ降り落ちた。

顔を上げると頬つたをつままれた。むにっつてされた。

艶やかな黒髪が肩、胸、腰、末広がりにながら広がっていく。

「つぐみ、またこんなところで授業サボってたのね。まったくもう、私がいないとダメな

んだから」

彼女の瞳は自分には少し眩しすぎて、ちよつと気おくれした。

「退屈。だから、抜け出しちゃったんだよ。それこそ、かなは大丈夫なの。授業うけなくて」

彼女の髪が風に揺れて、柔らかい風がこちらに漂ってくる。

「そう。だからね。連れ戻しに来たんだよ」

「わかった」

私は両手を上にあげて降参の意を示した。すると、かなはどこからともなく取り出してきた縄で私の両腕を縛った。

「かな」

「どうしたの？ つぐみ」

「これ、何？」

私は縛られている両手上げて、首をかしげた。見よう見まねで結んでいるのかほどこないようにするのが難しい。

「先生がこれを使つてって、私にくれたんだ。それとほら」

かなは首に下げている許可証を誇らしげに私に見せた。

「これもね、先生が作ってくれたの。許可証。これは授業中につぐみを捕まえに行った

時、他の先生に勘違いされないようにだつてね。これを見せるとお疲れ様ですつて言つてくれるの、凄いでしょ」

嬉しそうな、かなの姿にほほが緩む。

「ふふ、かなわないな」

自分は少しだけ嬉しかった。



## 優しくない部分

初めて彼女の事を意識したのは、いつのことだったっけ？

いわゆる、一目惚れというやつだね。

そのころの自分は今よりももっと、この世界について厭世的な人生感を抱いていた。

まあ、子供の器と環境の中に大人の価値観がサンドイッチになっていたんだ。想像に難くないだろう。

そういうわけで、私は授業をボイコットしていたわけだ。居眠り。読書。エトセトラ。漫画とかゲームとかしなかった。

先生は注意していたけれど、積み上がっていく満点のテストとあまりにも早熟にみえた自分に少しだけ、恐怖を抱いていた気がする。そして、それに気づくと失望を感じてしまっていた自分がいたことに、呆然としたね。うん、懐かしい。

そんなときのことだった。彼女Ⅱかな。ちゃんのことなだけだね。

夕陽が教室の中に差し込んできていて、黒板や机が暗い憂いの色を帯びていた時のお

話。

私がいっつも同じように船をこいでいた時、いきなり頬をつままれたんだ。

正直、びっくりしたね。

距離感覚がバグっているように感じたよ。

あの時の私は教室の中でもかなり浮いていたから。

ふわん、ふわん。していたから、まるで友達に話かけるように、こちらの顔を見ていたんだ。彼女の黒髪は夕焼けをうけて、輝いていたんだ。

そして、今こうして退屈な授業を少し工夫して受けているというわけです。まあ、退屈なことには変わらないけど。

そんな時に、スマホが振動した。

正直珍しいなって思った。

だって、電話とかショートメッセージを送ってくれるような友達なんて、私には片手の指でも余ってしまうから。つまり、そういうことです。

先生に見えないように、机の下で確認すると、今朝入っていた、魔法少女アプリの通知が来ていた。

曰く、

「モンスターが発生しました。周辺にいる、魔法少女に伝えていきます。担当の妖精さ

んと相談して出撃するか、決めてください」

なるほど、こんな感じで決めるんだな。

一人納得すると、クラスの中の一人が手を上げて、保健室に行つてくると先生に告げて教室の外に出て行つた。

こんなタイミングで、わざわざ。

そういえば、思い返して見ると、彼女はよく、こうして授業を欠席している。もしかすると。

とりあえず、いったん教室から出てみようかな。

「先生、私もお腹が痛くなつたので保健室行つていいですか？」

「つぐみさん。いいですよ」

先生は私の方を見ると、少し困つたような表情を浮かべていた。

そういえば私、彼女と違って、全然真面目に授業を受けていなかったわ。

ごめんなさい。

そう思いながら、人目につかない場所で妖精さんを引つ張り出した。

「ねえ、妖精さん。魔法少女って、学校に通っている子も多いんですよ。その子達ってどうしているの？」

「魔法少女の専門の学校があつて、そこに通っている。中学からだね」

「小学校の頃は？」

「担任とあと責任者に知らされているらしい」

「が、詳しくはこちらにも知らされていない」

「どういうこと？」

「俺ら、妖精たちと政府とでは別組織だということだ」

「仲は良くないのか…」

「そもそも、人間から見たら、俺らは、モンスターと五十歩百歩らしいな」

「お疲れさまです」

私は妖精へ敬礼をした。少し場の雰囲気を変えようとしたんだ。妖精さんも私たちとあまり変わらない価値観をもっていたら、嬉しいな。

色んな人、色んな妖精。それで充分。

現場に向かっていくにつれて、空気が重くなっていく。体が重くなっているように感じる。先ほどから電波が届かなくなり、スマートフォンの電源が突然切れた。

そこはその領域だった。

それがそこを支配しているのだ。

「ねえ、妖精。あれがモンスターなの」

その巨体はビルの如き大ききで、日に反射して光る鱗は黒く鈍く美しい。その翼は風を切り裂き粉塵を吹き飛ばす。その目は黒曜石のように鋭い。

それは叙事詩、神話、に登場する生物。黒龍はつまらなそうに、足元の魔法少女をいたぶっていた。

「ねえ、妖精さん。モンスターっていったい何者なの」

「それは詳しくは分かかっていない。異世界からの侵略者の場合もあるし、この世界ので生まれたものもいる」

「そう」

「ねえ、私は実は隠していたことがあるんだ、何だと思う」

「なぜ、キミは」

「時間切れだね、では行つてきまーす」

ビルの隙間から壁を蹴り上げ登り、屋上へ、そこから、龍と相對する。直視してわかる、その強大きさを。

「これは、どうしよもなさそう」

それは、魔法少女を使い終わった玩具のように地べたに放り投げ、大きな翼を広げて空へ、飛ぶ。

風がこちらにも伝わってくる。

大きな咆哮を天へと放つ。

「どう考えても、新人が戦う相手じゃないでしょ。我ながら損する性格しているなあ」  
手元の棒手裏剣を遊ばす。目を閉じて、体に流れている魔力を意識。

飛龍が大きく息を吸い込んだ。

とつさに、地面を強く蹴る。斜め向かいのマンションに飛び移る。

火球が渦巻きて、さつきまで足場になっていたビルを溶かす。ガラスが割れる音がビル群に響きわたる。

立ち止まっている場合じゃない。

飛龍の動きを見ながら、足を動かす。

龍はこちらへ急降下してきた。風切る音が爆弾のように聞こえる。

マンションから飛び降り、龍の死角に入るために、マンションで龍の視界を遮ろうとした、時。

マンションが崩れた。

龍の鉤爪が迫りくる。

手に持つ棒手裏剣を龍の関節部に放る。

しなやかで硬い鱗は刃を弾き、爪は私の体を吹き飛ばした。

銀行の中に吹き飛ばされた。窓ガラスを突き破り、ATMへと衝突した。

「野球ボールの気分だな。ハハ、おかしい」  
ああ、ちやかしてないと、やってらんねー。

銀行の中は静かで誰もいなかった。

不思議な感覚。

そこへ、火球が放たれた。

「マズ」

灼熱の炎はガラスすら溶かし、焦げた匂いが辺りに充満する。

スプリングラーが反応して、騒がしい警報音と共に水がまかれた。

幸い、直撃は避けたが皮膚の一部が、ひどい火傷を負っている。

水びたしの体で外へ飛び出す。

龍は空で踊り、体についた汚れをはらっている。

「どうしよう、手がない」

「手なら一つだけある」

気がつくと後ろに妖精が、いやアンティリルがいた。

「あれ、どうしたのこんなとろにまできて」

「なんで、俺をおいていこうとしたの?」

「なんでって、キミは足手まといじゃん、現に先日魔法少女さんも、妖精は近くに

なかったじゃん」

「足手まといでなければいいんだろ、現に今、つぐみは困っているじゃないか」

「そう、ありがとね。一応言っとくは。それで」

「必殺技だ」

「必殺技？」

「つぐみの中に渦巻いている、魔力に一つの方向性を与えるんだ。つまり、変身した時と同じ要領だよ。チャンスは一回。いま、あの龍はこちらの動きをまっけている」

「あれは、なめているの？」

「違う。学んでいるんだ。魔法少女のことを。だから、油断はしていない。同じ攻撃は二度は通用しないだろう」

「了解。さてと」

私は体の中の魔力を一点に集める。

手元にある、棒手裏剣と同じように、でも、威力をどんどん大きくしていく。

「俺は、一度だけ、奴の火球を防ぐバリアを張る。その時が狙い目だ」

「了解」

とつとつと、逃げればいいのに。そんなことも考えてしまったり、集中しなきゃ。

ねじり、空気を切り裂き、その鱗を突き刺き、貫くように、鋭く。



龍がこちらの異変に気づき、火球を放ってきた。

渦巻く火球は炎を広げて、焼き尽くす。

私たちは火球に包まれた。

その中で槍を構える。

視界が開けた。槍を投げようとした。

けど、

いない。

「うしろだー」

アンティリルの叫び声が聞こえる。

槍を放った。

槍は空気をそして、龍の鱗を貫いた。

けれど、龍の尻尾が、私のからだを襲った。

いくつもの棘が体に傷を与えた。

これは、だめ…か。

槍は龍の片翼を貫いたが。その瞳には闘志が満ちていた。

ポロポロな体を奮い立たせて、また、棒手裏剣を握る。

「あと、どれくらいかな」

なんて、気丈なフリをして、そんな自分が少しだけ誇らしい。それでも、終わりの時はすぐそこに。

私とその知らせを聞いたとき、もう手遅れだと思ってしまった。

そして、すぐにそんな自分に嫌気がさしてしまった。

気を取り直す。

ここらの有名な魔法少女が集まっている。

目的はモンスターの討伐。どうやら、地元の魔法少女がモンスターの足を止めているらしい。

びっくりした。

だって、そのモンスターは最上位、S級の区分がなされているらしい。

地元の魔法少女なんて、勝てっこないのに。

最悪の事態を頭に浮かべながら、私たちは目的地へと向かう。

そこには、ボロボロの魔法少女がいた。

なんで、そんなに頑張れるだろう。

幾つものビルは倒壊して、その場所は砂漠のような暑さだった。空を片翼のみで飛んでいる龍はこちらを見ると喋ったんだ。

そのモンスターが発する威圧はとても重く、思うように息ができない。体が重い。

そうそして、喋ったんだ。

知恵のあるモンスターだったんだ。

倒せるのだろうか、こんな化け物を。

「潮時か、楽しかったよ、童。名を聞いておこう」

彼女の声は小さくて、私には届かなかった。

「なるほど、そう申すのか。覚えておこう。いつか、また、な」

そう言つて、龍はこの場所から飛び去った。

後に残された魔法少女は電池が切れたかのように、ボタンと地面倒れた。

「ひどい怪我をしている。はやく、医務室に連れて行かないと」

私たちは協力して、彼女を運んだ。

自分たちの無力にさいなまれながら。